

註

- (1) 清喜裕二「来目皇子 埴生岡上墓侵入防止柵設置区域の立会調査」『書陵部紀要』第55号、宮内庁書陵部、2004年。
- (2) 清喜裕二・加藤一郎「来目皇子 埴生岡上墓の墳丘外形調査報告」『書陵部紀要』第60号、宮内庁書陵部、2009年。
- (3) 奥田 尚「来目皇子 埴生岡上墓外堤南面にみられた遺構について」『書陵部紀要』第60号、宮内庁書陵部、2009年。
- (4) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会、1978年。
- (5) 羽曳野市教育委員会編『古市遺跡群XXX I』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書第64、羽曳野市教育委員会、2010年。

附 来目皇子 埴生岡上墓の石材の石種について

奥田 尚

はじめに

来目皇子埴生岡上墓出土の石材を裸眼で観察した。石材の観察地点と使用石材の石種、石種の特徴、採石推定地について述べる。

1 石材の観察地点と使用石材の石種

暗渠の石材、拝所横の石材、第7トレンチ出土の石材、墳丘の石材について述べる。

(1) 暗渠の石材

暗渠内に詰められていた石材のごく一部である51個を観察した。石材の形状は、川原石様の石が48個、割石が2個、表面が磨かれた加工石が1個である。形状と石種の関係は、加工石の火山礫凝灰岩が1個、割石の石英安山岩が2個で、他の石種が川原石様の石である。川原石様の石は、中粒黒雲母花崗岩Aが1個、中粒黒雲母花崗岩Bが3個、片麻状粗粒黒雲母花崗岩が1個、石英閃緑岩が1個、斑岩が4個、ガラス質凝灰岩が11個、細粒砂岩が3個、中粒砂岩が20個、礫岩が3個、圧砕岩が1個である（第1表）。

(2) 拝所横の石材

拝所西側の植込部と墳丘裾の植込部に各4石ずつ人頭大の自然石が並んでいる。この石の表面には層状剥離がみられ、白色の漆喰様の付着物がみられるものがある。石種は全て同質の石英安山岩である。

(3) 第7トレンチ内にみられる石材

第7トレンチ中央の東西に敷かれた火山礫凝灰岩材には部分的に平坦な加工面がみられる。この敷石の南側のトレンチ底に径が1～8cmの火山礫凝灰岩の礫が散在する。この礫は敷石と同質であることから、敷石材の加工破片と推定される。トレンチの南東部には石英安山岩の割石片が2個、川原石様の砂岩と斑岩が1個ずつ、火山礫凝灰岩が2個みられる。

(4) 墳丘の石材

墳丘の南東部と北西部の稜線上に丸鑿跡が残る平坦面をもつ加工石がある。これらの石材は清喜・加藤により報告されている⁽¹⁾。石種は共に火山礫凝灰岩で、岩相が似ている。

2 石種とその特徴

識別した石材の石種は、中粒黒雲母花崗岩A、中粒黒雲母花崗岩B、片麻状粗粒黒雲母花崗岩、石英閃緑岩、斑岩、石英安山岩、ガラス質凝灰岩、火山礫凝灰岩、細粒砂岩、中粒砂岩、礫岩、圧砕岩である。各石種の特徴について述べる。

中粒黒雲母花崗岩A：色は灰白色で、石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～2mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が2～5mm、量が多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が1～1.5mm、量が僅かである。

中粒黒雲母花崗岩B：色は灰白色で、石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が3～5mm、量が中である。長石は灰白色と赤桃色のものがある。灰白色の長石は、粒径が5～8mm、量が中である。赤

桃色の長石は、粒径が5～8mm、量が僅かである。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が2～5mm、量が僅かである。

片麻状粗粒黒雲母花崗岩：色は灰白色で、片麻状を呈する。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が3～7mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が5～10mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が5～10mm、量が僅かである。

石英閃緑岩：色は灰白色で、石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～2mm、量のごく僅かである。長石は灰白色、粒径が5～7mm、量が多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が2～5mm、量の中である。角閃石は黒色、短柱状で、粒径が5～7mm、量が僅かである。

斑岩：色は灰色で、斑晶鉱物が石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が1～2mm、量の中である。長石は灰白色、粒径が1～5mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～1.5mm、量が僅かである。石基はやや粒状、ガラス質である。

石英安山岩：色は灰色で、斑晶鉱物が石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明で、融蝕されて球状を呈するものと複六角錐を呈するものがある。融蝕された石英は、粒径が5～6mm、量のごく僅かである。複六角錐の石英は、粒径が2～5mm、量が僅かである。長石は灰白色で、融蝕されて球状を呈するものと短柱状を呈するものがある。融蝕された長石は、粒径が5～8mm、量が僅かである。短柱状の長石は、粒径が2～8mm、量が多い。黒雲母は黒色板状で、粒径が1～3mm、量が僅かである。基質はガラス質である。

ガラス質凝灰岩：色は灰色で、石基がガラス質である。

火山礫凝灰岩：色は灰白色で、構成粒がガラス質凝灰岩、軽石である。ガラス質凝灰岩は黒色、ガラス質で、粒形が角、粒径が1～12mm、量が多い。細かい粒が多い。軽石は灰白色、粒形が亜角、粒径が5～8mm、量が僅かである。基質は緻密である。

細粒砂岩：色は淡茶褐色で、構成粒が細粒である。

中粒砂岩：色は淡茶褐色で、構成粒がガラス質凝灰岩、石英である。

礫岩：色は灰色で、構成粒がガラス質凝灰岩である。ガラス質凝灰岩は、粒形が亜角、亜円、粒径が3～30mm、量が多い。基質は緻密である。

圧砕岩：粗粒黒雲母花崗岩が圧砕を受けたポーフィロイド様の圧砕岩である。

第1表 暗渠材の形状と石種

石 種	形 状					合 計
	川 原 石			加 工 石		
	角	亜角	亜円	割石	磨加工	
中粒黒雲母花崗岩A		1				1
中粒黒雲母花崗岩B		2	1			3
片麻状粗粒黒雲母花崗岩			1			1
石英閃緑岩		1				1
斑岩	1	3				4
石英安山岩				2		2
ガラス質凝灰岩		8	3			11
火山礫凝灰岩					1	1
細粒砂岩		2	1			3
中粒砂岩	1	11	8			20
礫 岩		3				3
圧砕岩	1					1
合 計	3	31	14	2	1	51

3 石材の採石推定地

当墓が築造されている丘陵は、新生代第四紀洪積世に堆積した大阪層群の地層がほぼ水平に分布する地で、出土している加工石の凝灰岩や加工石片の石英安山岩、川原石様の石は分布しない地である。観察した石材は全て他地から運ばれた石である。

加工石の火山礫凝灰岩は、岩相的に新生代新第三紀中新世の二上層群下部ドンズルボー層の火山礫凝灰岩の岩相の一部に似ている。採石地として南河内郡太子町山田の鹿谷寺跡北方付近が推定される。割石と山地に転在する石と推定される石英安山岩は、黒雲母が細粒で少なく、複六角錐をなす石英や融蝕された石英が含まれ、長石が多いことから、羽曳野市の鉢伏山西側山腹付近に分布する石英安山岩の岩相の一部に似ている。鉢伏山西側の山地に転在する石を採石されたと推定される。川原石様の石は、当陵墓の東方にある石川の川原にみられる石に石種とその岩相や形状が似ている。石川の川原石を採石されたと推定される。

註

(1) 清喜裕二・加藤一郎「来目皇子 埴生岡上墓の埴丘外形調査報告」『書陵部紀要』第60号、宮内庁書陵部、2009年。